

学位論文要旨および審査要旨

〔博士（学術）〕

氏名 辛 奕 羸

〈学位〉種類	博士(学術)	論文項目	日英中「の、of、的」の対照研究
授与番号	博甲国第31号		
授与年月日	平成26年9月30日	論文審査員	主査 金田一 秀穂
授与の条件	学位規程第5条		副査 今泉 喜一 田中 寛

学位論文の要旨

日英中に見られる「N+の/of/的+N」のフレーズについての対照研究や個別の研究は、従来多くの研究者が関心をもってきた問題の1つであり、様々な成果が得られている。統語論の面からの研究、意味論の面からの研究、情報学の面からの研究、翻訳の面からの研究などがある。確かに、「N+の/of/的+N」についての研究は多いが、本研究では更に研究の余地があると考えている。

従来の多くの研究は表層の言語現象について研究してきた。このような研究では次のような問題に答えにくい。

①「の/of/的」は似た文法機能を持つが、なぜ、2つの名詞を繋いだ後で、言語間に、対応と非対応2つの場合を生じるのか。②「の」、「of」、「的」3者は本質的に、どのような違いがあるのか、また、③その違いは「N+の/of/的+N」の使用に、どのような影響を与えるのか、④文字の背後の認知メカニズムは何であるのかなどである。

実は、それらの問題は「N+の/of/的+N」の本質的問題である。それらの問題に答えることにより、「N+の/of/的+N」の本質的な異同点を明らかにして、言語の表層での対応と非対応の原因をよく説明することができるようになると考えられる。

言語の発展は人間の認知と大いに関係がある。言語は人間の認知を反映する、思惟の外在的な表現形式であるので、全ての言語の問題は人間の認知の問題であると言える。言語の本質についての研究は、つまり、人間の認知についての研究である。そのような研究によって、上述の問題(①～④)、つまり、「N+の/of/的+N」の本質的問題をよく説明することができるようになると考えられる。

また、「N+の/of/的+N」の先行研究において、認知言語学の面から、或いは前言語的構造の面から研究している論文は少ないので、本論文は、従来の研究の不足を補うために、認知言語学の考え方と前言語的構造の面から「N+の/of/的+N」の研究に新しい活力を与えたいと考えている。

本論文は、理論研究と各論の2つの部分に分かれている。第1章～第5章は理論研究であり、第6章は各論である。それぞれの内容は以下のとおりである。

理論研究(第1章～第5章):

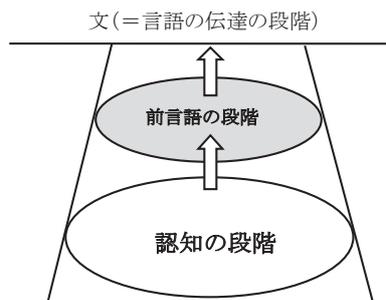
第1章は基本概念を扱う。本論文で扱う認知言語学、認知心理学、日本語構造伝達文法、語用論の基本概念について述べ、本論文で使用する新しい用語を説明する。

第2章は名詞の意味的な分類について論じる。日本語、英語、中国語での名詞の扱いには違いがあるので、対照できるようにするために、日英中の名詞の分類を限定的なものにして、本論文の基本的な立場を明らかにする。すなわち、本論文では、名詞としては人名詞、モノ名詞、場所名詞、時間名詞、動作名詞の5種類の名詞のみを扱うことにすることを論じる。

第3章は通時的な「の」、「of」、「的」の研究である。現代日英中「の/of/的」3者は似た文法機能と意味を持つが、元来その3者はどのようなものであったのか、また、どのような歴史変化を通じて、似た文法機能を持つようになったのかについて考察する。通時面から、「の」、「of」、「的」3者を考察して対照する。

第4章は認知文法の面から「の」、「of」、「的」を捉える。現代日英中「の/of/的」3者は似た意味を表すが、それらの意味は「の/of/的」そのものの意味ではなく、「の/of/的」の前後の2つの名詞間に生じる論理関係だと考えられる。それで、「の/of/的」そのものの意味は何であるのかを明らかにする必要がある。この問題が本章の研究の中心である。

第5章はフレーズ「N+の/of/的+N」の前言語構造の対照研究である。本章では前言語構造が生じることを前提として、言語の伝達プロセスを考察する。「N+の/of/的+N」の前言語構造のフレームを明らかにして、異同を対照した。言語が文として伝達される以前には図要-1のようなプロセスが存在するものと考えている。



図要1 文の産出(巨視的視点から)

学位論文要旨および審査要旨

各論(第6章):

第6章では第3章、第4章、第5章で得られた結論と仮説に基づいて、具体的な例を使って、「N+の/of/的+N」を対照する。最後に、意味と前言語的構造の2つの面から、表層言語で「N+の/of/的+N」を使用する原因、使用しない原因、多義を生じる原因などを考察する。

第6章では各論部分において25通りの名詞の組み合わせを設定するが、これは研究過程の現段階のものである。多くの要素を持つ名詞の組み合わせは膨大な数の体系となるはずであり、また個々の組み合わせの考察にも複雑な要素がからむはずである。これを正面から研究するには多くの時間が必要である。しかし、敢えて第6章を設定する目的は、第1章～第5章で得た仮説の有効性を確認し、今後の研究の指針を得ることにある。このため、研究対象の規模を極力小さくし、25通りというひな形を扱うことになった。各名詞の性質も、総体を捉えず、一側面のみを見ることにした場合も多い。

以上のような内容を持つ本論文は主に以下のような成果を得た:

- ① 日本語の「の」は格助詞であるか、名詞と名詞を繋ぐ別の助詞であるかについての問題を改めて考察し、後者であるとの結論を得た。第3章参照。
- ② 「的」の文法化の経路を明らかにした(「形容詞一名詞一副詞一助詞」)。第3章参照。
- ③ 通時的側面から、「の」、「of」、「的」3者の伝統文法での異同点を明らかにした。第3章参照。
- ④ 「の」そのものの意味を明らかにした。(ある名詞に心的な接触をするために、参照点となる名詞とその名詞の間にメンタル・パスを提供すること。)第4章参照。
- ⑤ 「of」そのものの意味を明らかにした。(1つの存在物における別の存在物との内在的な関係を表すこと。)第4章参照。
- ⑥ 「的」そのものの意味を明らかにした。「的」と関係がある2つの部分のうちの1つを重点化すること。)第4章参照。
- ⑦ 認知言語学の「概念」を可視化した。(日本語構造伝達文法の「構造」モデルで可視化した。)第5章参照。
- ⑧ 「前言語構造」という概念を提出した。(日本語構造伝達文法の「構造」に当たる。)第5章参照。
- ⑨ 日本語構造伝達文法の考え方を認知言語学に導入した。第5章参照。
- ⑩ 「N+の/of/的+N」3者の前言語構造におけるフレームを明らかにして対照した。第5章参照。
- ⑪ 前言語構造の面から「N+の/of/的+N」の構文意味を明らかにした。第5章参照。
- ⑫ 「N+の/of/的+N」を前言語構造の面から考察して、表層での対応、非対応、多義の原因を仮説してみた。第6章参照。
- ⑬ 「N+の/of/的+N」3者は表現形式では対応するが、意味的に完全に対応することはないということを明らかにした。第6章参照。
- ⑭ 「N+の/of/的+N」を生じる十分条件と必要条件を提示してみる。第6章参照。

本論文では「日本語構造伝達文法」の考え方に基づいて、認知言語学の理論を援用しつつ、「N+の/of/的+N」において、「領有—被領有—R」と「行為—対象物—R」の構文意味を伝える構造を考えた(構文意味は日本語を基準としてまとめる)。この構造をもとにして、日本語「N+の+N」と英語「N+of+N」と中国語「N+的+N」3者の対照研究を行った。

論文審査結果の要旨

日本語の「の」、英語の「of」、中国語の「的」は、名詞とともに使用されて他の名詞を修飾する機能を持つ。この3者は従来、表層にある文のレベルにおいて、主として翻訳上の関心から、2言語間で対応関係が研究されることが多かった。本論文は、この類似した機能をもつ3者をその本質において捉えて対照しようとしている。依拠する主要な理論は日本語構造伝達文法の深層構造理論と認知言語学の参照点理論である。この両理論に共通する特徴は、人間がある判断を表層の文で表現する前の段階で、事態をどのように認識しているのかを理論的に解明しようとするところにある。

本論文では、まず「の/of/的」3者それぞれの歴史的展開における特質を捉えて対照する。次に、認知言語学の参照点理論においてこの3者の特質を捉えて対照し、そのうち、日本語構造伝達文法の前言語構造においてこの3者の特質を捉えて対照する。この3種類の方法による対照研究の結果として、「の/of/的」3者に関する新しい仮説としての理論が導き出される。そして最後に、この仮説に従って25種類の名詞の組み合わせ事例の検討を行い、結論を得る。

[論文の構成]

目次
序論

- 1 表層と深層—深層の重要性
 - 2 問題の所在
 - 3 研究課題
 - 4 本論文の構成
- 第一部 理論研究
- 第1章 基本概念
 - 1.1 認知言語学について
 - 1.2 認知心理学と「注意」
 - 1.3 日本語構造伝達文法と「主体・客体」
 - 1.4 語用論と「協調の原則」
 - 1.5 本論文の用語について
 - 1.6 まとめ
 - 第2章 名詞の意味的な分類
 - 2.1 日本語の名詞
 - 2.2 英語の名詞
 - 2.3 中国語の名詞
 - 2.4 本論文で扱う名詞
 - 第3章 「の」、「of」、「的」3者の伝統文法から見た 研究
 - 3.1 日本語「の」について
 - 3.2 英語の「of」について
 - 3.3 中国語の「的」について

学位論文要旨および審査要旨

3.4 「の」、「of」、「的」3者の表層意味の対照研究	
3.5 まとめ	
第4章 「の」、「of」、「的」3者の認知文法から見た 研究	
4.1 日本語の「の」(連体修飾語を構成する用法)について	
4.2 英語「of」について	
4.3 中国語の「的」について	
4.4 「の」、「of」、「的」3者の本質的意味の対照研究	
4.5 まとめ	
第5章 日英中「N+の/of/的+N」の前言語構造と対照分析	
5.1 先行研究と本研究	
5.2 「N+の/of/的+N」3者の前言語構造の形成	
5.3 「N+の/of/的+N」の前言語構造の対照研究	
5.4 まとめ	
第二部 各論	
第6章 日英中「N+の/of/的+N」の対照研究	
6.1 先行研究	
6.2 フレーズ「N+の/of/的+N」の対照考察	
6.3 日英中「N+の/of/的+N」の対照研究(A～Y)	
6.4 A～Yのまとめ	
結論	
謝辞	
主要参考文献	

[論文各章の内容]

序論

日本語の「の」、英語の「of」、中国語の「的」3者の意味と使い方には似ているところがあるが、異なるところもある。これは文という表層での現象であり、このことについて論じるときは、「の」、「of」、「的」3者そのものが何であるのかについて深層構造レベルで解明しなければならない、とし、文という表層表現において異同が存在することについて、原因を深層の構造のあり方から研究する、という本研究の研究方針を述べている。ただし、本研究の設定する深層構造はチョムスキーの生成文法での深層構造とは異なるものである、としている。

続いて、「の/of/的」については日本、欧米、中国で盛んに研究が行われているが、なお研究の余地があるとし、以下の問題点について研究しなければならない、としている。

①辞書には「の/of/的」の意味が「所有」、「所属」、「材料」、「場所」などであると明示されているが、これは「の/of/的」そのものの意味ではなく、深層における「の/of/的」の2名詞をつなぐ機能から発生する表層的現象である。表層での意味が「所有」であるか「材料」であるかは構造のあり方が決定するのである。このことの解明がなされなければならない。

②「の/of/的」の従来行われていた対照研究は表層の言語表現での対照研究であり、表現における「の/of/的」の使用に異同があることが盛んに論じられた。しかし、なぜそのような異同があるのかについては適切に説明することができなかった。本研究では深層構造そのものの対照研究により、その説明が可能になると考える。多義発生の説明もできるようになる。また表層構造以前に前言語の段階の存在を設定することによりニュアンスの存在も説明可能となる。

この①②の研究を進めるに当たって8つの課題を設定することを

述べ、さらに本論文の構成を説明している。

第一部 理論研究

第1章 基本概念

本論文で扱う用語を説明している。認知言語学からは「前景と背景」、「メタファー」、「メトニミー」、「イメージスキーマ」、「プロトタイプ理論」、「参照点理論」について必要な説明を行い、認知心理学からは「注意」について、日本語構造伝達文法からは「主体・客体」について、語用論からは「協調の原則」について説明している。

また本論文で独自に設定する用語として、「重点化」、(文として発話された)「言語」があり、ほかに、「日本語構造伝達文法」の考え方から設定した「前言語」、「前言語構造」があるとし、「前言語構造」は日本語構造伝達文法の構造モデルにより示される、としている。

加えて、日本語研究から生まれた「日本語構造伝達文法」の理論を他言語に適用するために、「主体」、「客体」、「属性」の用語の内容を若干変更したことを述べ、さらに「可視的動詞」と「不可視的動詞」について論じている。

本章は第2章以降における論述の理解を助けるためのものと位置づけられる。

第2章 名詞の意味的な分類

本研究では名詞が重要な位置にあることから、名詞をどのように扱うのが研究を進めるうえで現実的であるかについて考察している。日本語、英語、中国語での名詞の扱いには違いがあるので、対照できるようにするためには、日英中の名詞の分類を限定的なものにする必要があると判断し、本論文では、名詞としては人名詞、モノ名詞、場所名詞、時間名詞、動作名詞の5種類の名詞のみを扱うことにした、としている。

3言語の膨大な名詞をこのような形で整理して研究対象にすることができたことは一つの見識であると評価できる。

第3章 「の」、「of」、「的」3者の伝統文法から見た研究

現代語の「の/of/的」3者は似た文法機能と意味を持つが、その本質を捉えるためには、元来その3者がどのようなものであったのか、また、どのような歴史的变化を通じて似た文法機能を持つようになったのかについて把握する必要がある。この認識のもと、(伝統文法の中で)これまで行われてきた先行研究の成果に依拠する形で「の」、「of」、「的」の通時的な解明を行っている。

日本語の「の」については、まず歴史的に発生した「の」の各種の意味・用法について概観して、その全体像を把握している。続いて、本研究に大きく関わる「格」の定義について考察し、「格」は伝統的な国語学での定義ではなく、現代の日本語学研究者による定義のほうが適切であるとしている。ここから、「の」は格助詞には当たらず、格の関わる論理関係にある2つの名詞をつなぐ(名詞で名詞を修飾する)助詞であるとしている。

英語の「of」についても、まず通時面から考察している。もともと外形として強形「æf」と弱形「of」を持つ前置詞的副詞「af」が存在したが、これが「of」に統一され、のちに強形として生じた「off」が「of」の副詞としての用法を担うようになって以降、「of」は前置詞としての意味と用法を保ち、大きな変化がなく、主として全体と部分の関連を表す語として現代英語になっている、としている。

次に、所有格を表す「's」と「of」の異同を検討し、「's」の前に置かれる名詞が有情名詞に限定されることから、「の」、「的」に似て自由度の高い前置詞である「of」を本論文での研究対象にすることを述べている。

中国語の「的」については、中国語文法において重要な位置を占める語であり、先行研究も多い、としている。本研究ではそれらの先行研究に依拠しつつ、通時面から考察している。

まず、後に「的」に連体機能等をゆずることになる「底」について論じる。「底」の歴史的展開を述べ、代名詞から指示代名詞へ、さらに疑問代名詞、連体助詞へと発展したとしている。次に「地」にも触れ、名詞用法のほか、助詞として描写作用と進行中のアスペクト表示機能があったとしている。

このうち、「的」について論じている。古代中国語においては「的」は形容詞、名詞、副詞、助詞として存在した。形容詞としての「白い」の意味での「的」は、名詞としての「弓矢のまと」になり、さらに名詞「遠く」「標準・目標」「音階の標識」「婦人の赤い装飾」「そびえ立つ山頂」へと意味を拡張した。また、名詞「弓矢のまと」である「的」は、副詞「確実に・的確に」へ、さらに「必ず・きっと」、「いったい」へと拡張した。これらの拡張はメタファーないしメトニミーによるものであるとしている。

宋代において、「底」は連体助詞としての機能とともに内容語としての多くの意味を持つようになっていたが、音声的に近似しており、内容語としての意味を失いつつあった副詞の「的」に連体助詞としての機能をゆずり、「底」自身は名詞に特化することになった。このとき、「底」の持っていた「地」の要素も「的」に引き継がれた、としている。

「の/of/的」3者の意味の対照について、以上の通時的把握から得られた情報に基づき、完全対応をする場合、部分対応をする場合、対応しない場合に分類して論じている。

第3章では伝統的文法研究の成果に依拠して研究を行った結果、「の/of/的」3者の表層での歴史的展開の異同点が明らかになった。すなわち、「の」と「of」は機能語として展開してきたことに特徴があり、「的」は内容語から機能語へと文法化の道をたどってきたことに特徴があることが判明した。これらの異同を捉えたことは、次章以下でこの3者について考察を進める上での理論的基礎を固めたものと評価できる。

第4章 「の」、「of」、「的」3者の認知文法から見た研究

現代語の「の/of/的」は似た意味を表すが、それらの意味は「の/of/的」そのものの意味ではなく、「の/of/的」の前後の2つの名詞間に生じる論理関係だと論者は考えている。そこで、そもそも「の/of/的」そのものの意味は何であるのかについて明らかにする必要があると論者は考える。この章では認知文法の面からこの3者の本質を捉えることになる。

日本語の「の」は、認知文法理論で考察すると、日本語の格助詞と共通する要素を持つ反面、異なる点もあることがわかる。「の」はメンタル・パスを提供することでは格助詞と共通している。しかし、格助詞が意味を持つので心的接触のターゲットを制限することができるのに対して、「の」は意味を持たないのでターゲットの範囲を制限することができない。この点が異なっている。ターゲットの範囲を制限できないため、「の」は多義を生じやすい、としている。

英語の「of」については、認知言語学のラネカーが、「2つの存在物における内在的な関係を表す」ものと述べている。これは2つの存在物間にある「内在関係」「外在関係」に視点を置いて「on」、「to」、「of」を考察した結果導かれた結論である。しかし、論者は「内在的な関係」という表現では曖昧すぎて、多くの例外を生じてしまうとしている。そこで、論者は現代英語の「of」が、原義である「分離」から派生したものであるとの理論を援用して考察し、ラネカーのいうその2つの存在物は、限定のない2つの存在物ではなく、1つの存在物、

1つの全体から生じる2つの存在物であると考えらるべきである、との結論に至った。すなわち、論者は「of」の機能を「1つの存在物における2つの物の内在的な関係を表す」ものとする。

中国語の「的」が連体機能を持つようになったことは「的」の意味的な通時的展開とは関係なく、音声的な理由によるものであることが第3章で判明した。しかし、認知言語学的に考察すると、「的」がメンタル・パスを提供する場合の「参照点」と「ターゲット」が表層で「的」の前後の名詞となる際に「的」によりこのいずれかが重点化されるという現象があることから、「的」が歴史的展開において一貫して保持していた、あるモノ、ある部分を卓立化する機能がここで発現していると論者は考えている。すなわち、「的」は通時的意味の拡張とは関係なく「底」から連体機能を引き継いだわけであるが、その際「的」は自己に本来備わっていた卓立の要素を連体機能に付加した、と論者は考えている。

論者は先行研究で明らかになっている「的」の現代中国語での5種類の意味それぞれにおいてこの「重点化」を確認している。

以上の個別の考察のうちに、「の/of/的」3者を参照点理論のモデル図で表し、その異同を形の上で把握できるようにしている。また対応関係も表に示している。

本章では、「の/of/的」3者を認知言語学理論で捉え、その異同について明らかにしたことが評価できる。

第5章 日英中「N+の/of/的+N」の前言語構造と対照分析

本研究では発話表現としてのことばを生じるプロセスは、少なくとも3つの段階から成ると考えている。すなわち、事態を構成する諸要素間の関係を認知する「認知の段階」と、認知した概念を論理関係の形で整理する「前言語構造形成の段階」と、文法と音声をエンコードして「言語として伝達する段階」の3段階である。

この「前言語構造形成の段階」を設置することが本研究の特徴の1つであるが、この段階の存在を確かなものとして表現するために、日本語構造伝達文法の構造モデルに基づいて設定した本研究の構造モデルを使用している。このモデルに基づいて「N+の/of/的+N」の前言語構造のフレームを明らかにする。このため、「隣人の子供が来る/the son of the neighbour comes/邻居的孩子来了」の例を中心に考察を進めている。

この章では、2名詞の関係が構造モデルの上で、第3章、第4章で得られた「の/of/的」それぞれの特徴に従って明示的に表現されるようになり、その異同が形として把握できるようになった。このことが評価できる。

第二部 各論

第6章 日英中「N+の/of/的+N」の対照研究

第3章、第4章、第5章で得られた理論に基づいて、25通り(5種類の名詞どうしの組み合わせで、 $5 \times 5 = 25$)の組み合わせのそれぞれにおいて具体的な例を使って、非常に精力的に体系的に個々の「N+の/of/的+N」を対照している。各例において、意味と前言語的構造の両面から考察を行い、表層言語で「N+の/of/的+N」を使用する原因、使用しない原因、多義を生じる原因を論じている。また、「N+の/of/的+N」を生じる十分条件と必要条件を考察している。

すべてのありうる事象について検証するためには膨大な時間と労力が必要となるが、本章では第2章で確定した名詞5種類に限定して考察することにより、これを可能とした。また多義の生じる原因には実にさまざまな要因が存在するが、ここではこの研究に関係のある要因にのみ限定して考察を行っている。

学位論文要旨および審査要旨

最後に「の/of/的」の対応関係を一覧表にし、「N+の/of/的+N」の意味での対応と非対応について論じている。

本章では、工夫して体系的に設定した多くの実例に当たり、理論研究で得られた理論に従って考察を行っていることが評価できる。

結論

巨視的に見れば、日本語「N+の+N」、英語「N+of+N」、中国語「N+的+N」3つのフレーズは類似の意味を伝えているように見えるが、微視的に見れば、「の/of/的」はそれぞれの意味・機能が違うので、異なる内包意味を伝えていることが判明した。

「の」は論理関係にある2つの名詞を直接つないでしまうので、「N+の+N」の意味はその論理関係を知らなければ決められない。英語の「of」は2つの名詞間に内在的な関係を要求するので、「of」でつながれたとき、内在的な関係があることが「N+of+N」の特徴になる。中国語の「的」そのものの意味・機能は「『的』と関係がある2つの名詞のいずれかを重点化すること」であるので、「的」で2つの名詞をつなげば、「N+的+N」の1つの名詞が重点化されていることになる。(それで、中国語の「的」を使わない「N+N」の形で伝える意味が日本語の「N+の+N」で伝える意味と近いと考えられる。)

つまり、言語の表層で見れば、日本語、英語、中国語3言語は対応するように見えるが、異なる言語には異なる言語特徴があるので、同じ「N+の/of/的+N」という形で表現しても、意味の上では100%の対応をすることがないという結論に至った。

[論文の特徴]

この論文には次のような特徴がある。改めて箇条書きにする。

- ① 日本語の「の」は格助詞であるか、名詞と名詞をつなぐ別の助詞であるかについての問題を改めて考察し、後者であるとの結論を得た。[第3章]
- ② 「的」の文法化の経路を明らかにした(「形容詞-名詞-副詞-助詞」)。[第3章]
- ③ 通時的側面から、「の」、「of」、「的」3者の伝統文法での異同点を明らかにした。[第3章]
- ④ 「の」そのものの意味を明らかにした。(ある名詞に心的な接触をするために、参照点となる名詞とその名詞の間にメンタル・パスを提供すること。)[第4章]
- ⑤ 「of」そのものの意味を明らかにした。(1つの存在物における2つの存在物の内在的な関係を表すこと。)[第4章]
- ⑥ 「的」そのものの意味を明らかにした。(「的」と関係がある2つの部分のうちの1つを重点化すること。)[第4章]
- ⑦ 認知言語学の「概念」を可視化した。(日本語構造伝達文法の「構造」モデルで可視化した。)[第5章]
- ⑧ 「前言語構造」という概念を提出した。(日本語構造伝達文法の「構造」に当たる。)[第5章]
- ⑨ 日本語構造伝達文法の考え方を認知言語学に導入した。[第5章]
- ⑩ 「N+の/of/的+N」3者の前言語構造におけるフレームを明らかにして対照した。[第5章]
- ⑪ 前言語構造の面から「N+の/of/的+N」の構文意味を明らかにした。[第5章]
- ⑫ 「N+の/of/的+N」を前言語構造の面から考察して、表層での対応、非対応、多義の原因を考察した。[第6章]
- ⑬ 「N+の/of/的+N」3者は表現形式では対応するが、意味的に

完全に対応することはない、ということを明らかにした。[第6章]

- ⑭ 「N+の/of/的+N」を生じる十分条件と必要条件を考察した。[第6章]

[今後の課題]

本研究で得られた理論は仮説的段階のものであり、今後多くの事例で検証し、必要とあれば修正を加え、より適正な理論にすることが課題である。また、特に日本語、中国語にある、直接対照の対象となりにくい現象も分析し、それらの扱いについても考察することが課題となる。

[研究史における意義]

機能的に似ていると考えられる「の/of/的」を2者ではなく3者において、しかも深層における本質的な特徴において対照させたことは新しい試みである。日本語構造伝達文法と認知言語学の理論から捉えていることも新しい。研究史においては、この2点が意義あるものとして評価できる。

[評価]

以上のように、本研究は「の/of/的」3者それぞれの本質を日本語構造伝達文法と認知言語学の理論から捉えて対照し、価値ある結果を導いた。この新しい試みとその成果を論じた本論文は内容的にも研究史的にも大きな意義の認められる論文であると評価できる。このため、審査者一同は、論者である辛突羸氏に博士号授与がふさわしいとの判断に至った。

〔博士（学術）〕

氏名 董 昭 君

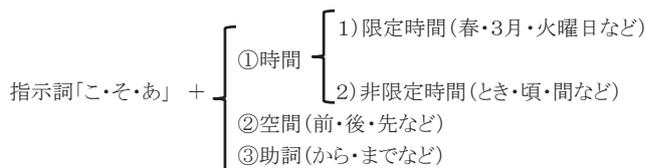
〈学位〉種類	博士(学術)	論文項目	指示詞と時間に関する研究		
授与番号	博甲国第 32 号				
授与年月日	平成 26 年 9 月 30 日	論文審査員	主査	今泉 喜一	
授与の条件	学位規程第 5 条		副査	金田一 秀穂 楠家 重敏 森山 卓郎	

学位論文の要旨

本論文では「日本語構造伝達文法」の考え方に基づいて、認知言語学の理論を援用しつつ、「N+の/of/的+N」において、「領有-被領有-R」と「行為者-対象物-R」の構文意味を伝える構造を考えた（構文意味は日本語を基準としてまとめる）。この構造をもとにして、日本語「N+の+N」と英語「N+of+N」と中国語「N+的+N」3者の対照研究を行った。

先行研究では、指示詞「コ・ソ・ア」について、現場指示の研究や文脈指示の研究や照応の研究などが多数なされてきた。ところが、指示詞と時間に関する研究については、まだ進んでいるとは言えない。本稿は、時制の視点から、時間を示す指示詞の指示範囲（時制領域の分布）や使い分け、用法などを明らかにして、指示詞「コ・ソ・ア」の本質を解明する。

時間を示す指示詞の種類は多い。本稿では、時間を示す指示詞を次のような三つの用法から研究する。①「指示詞+時名詞」。②「指示詞+空間名詞」。③「指示詞+助詞」。①「指示詞+時名詞」の類は、さらに、1) 限定時間と2) 非限定時間に分ける。



本稿は、時間を指す指示詞の実例を集め、「現在・今」を発話時点にして、町田(1989)の時制についての定義を用いて、指示詞「コ・ソ・ア」を分類し、時制の視点から指示詞を指す時間と指示詞を指す事象・出来事と発話時点の関係をモデル化する。その上で、指示詞は時制によって使い分けがあるという見解を検証することを行った

1) 指示詞「この・その・あの+時間」「とき・春・曜日・ごろ・2010年・3月など」の時間を示す指示詞を、限定時間の指示詞(この春)と非限定時間の指示詞(このとき)に分けた。限定時間の指示詞の時制の使用率と非限定時間の指示詞の時制の使用率を比較して分析を行った。そして以下のようなことが分かった。

- 限定時間の指示詞と非限定時間の指示詞(「このごろ」などを除く)の時制の使用領域の分布は、いずれも主に「過去」で使われている。「この系」は「過去・現在・未来」の三つの領域で使われ、「その系」は「過去・未来」で使われる。「あの系」は、「過去」にしか使われない。
- 限定時間の指示詞は、「コ系」は、「ソ系・ア系」より多く使われる傾向があり、それに対して、非限定時間の指示詞は、「ソ系」は、「コ系・ア系」より多く使われる傾向が見られる。

2) 限定時間としての「この春・その春・あの春、この3月・その3月・あの3月、この・その・あの+(日・月・火・水・木・金)曜日」の実例を集め、絶対時制・相対時制の視点から、使用領域の時制及び「コ・ソ・ア」の用法や区別などの分析を行った。改めてまとめると、以下の表のようになる。

表一20「この・その・あの+春、この・その・あの3+月、この・その・あの+(日・月・火・水・木・金)曜日」の時制の使用領域の分布

指示詞	時制がある場合					時制がない場合
	過去		現在 ¹	未来		
	相対 テンス	絶対 テンス		相対 テンス	絶対 テンス	
この系 ²	○	○	○	○	○	○
その系	×	○	×	×	○	○
あの系	×	○	×	×	×	×

¹この+(月、火、水、木、金、土、日)曜日は、「現在」という時制の領域で使わない。

²この系は絶対時制で出来事を捉える場合は、「この」は、発話時点から限定された一定の期間(今年の・今週の・この近くの)を指し、その中の一時点を指示し、さらに、発話時点から、その指示した時点の出来事を見ている(例 1、4、5、10、13、128、131、132を参照)。

学位論文要旨および審査要旨

- ・ 限定時間としての「この系・その系・あの系」の使用領域は、「この系」は、過去・現在・未来の三つの領域で使われている（「この+（日・月・火・水・木・金）曜日」を除いて）。「この系」は、現在の領域でしか使われない（「この+（日・月・火・水・木・金）曜日」を除いて）。「その系」は、過去・未来の領域に使われている。「あの系」は、過去の領域にしか使われない。
- ・ 限定時間の「この系・その系・あの系」の時制的な使用率から見ると、「この系」は、「その系・あの系」より多く使われている。
- ・ 限定時間としての「この系・その系・あの系」の指示詞「この・その・あの」は、絶対時制で出来事を捉えている。特に「この系」の「この」は、発話時点から限定された一定の期間（今年の・今週の・この近くの）を指し、その中の一時点を指示し、さらに、発話時点から、その指示した時点の出来事を見ている（例 1、4、5、10、13、128、132、132 を参照）。
- ・ 限定時間としての「この系」の指示詞「この」は、相対時制で出来事を捉えることもできるが、あまり使われない傾向がある（例 8、9、17、18、134、135 を参照）。

3) 非限定時間の「このとき・そのとき・あのとき」の実例を集めた。絶対時制・相対時制の視点から、使用領域の時制及び「コ・ソ・ア」の用法や区別などの分析を行った。改めてまとめると、以下のようになる。

表一21「このとき・そのとき・あのとき」の時制の使用領域の分布

指示詞	時制がある場合					時制がない場合	
	過去		現在	未来		超時的なもの	その他
	相対テンス	絶対テンス	絶対テンス	相対テンス	絶対テンス		
このとき	○	×	○	○	×	○	×
そのとき	×	○	×	×	○	○	○
あのとき	×	○	×	×	×	×	×

「コ」は絶対時制・相対時制の両方の視点から捉えることができるという結果を得た。「このとき」は発話時点から出来事を捉えることができ（絶対時制）、基準時からも出来事を捉えることができる（相対時制）。「ソ・ア」は、「コ」と異なり、絶対時制でしか使用されないと考えられる。「そのとき・あのとき」は、いつも発話時点から出来事を捉えている。時制の使用領域では、「コ系」の時間を示す指示詞（このとき）は、過去・現在・未来の三つの領域で使える。「ソ系」の時間を示す指示詞（そのとき）は、過去・未来の領域で使える。「ア系」は、過去の領域でしか使われないことがわかった。

4) 指示詞「この・その・あの」+ 空間名詞（前・後・先など）の時間を指す指示詞の実例を集め、「現在・今」を発話時点にして、町田（1989）の時制についての定義を用いて、時制の視点から指示詞を指す時間と指示詞を指す事象・出来事と発話時点の関係をモデル化し、指示詞「この・その・あの」+ 空間名詞（前・後・先など）の時制によっての使い分けを確認して検証した。そして、その全体構造を明らかにした。次のようになる。

- ① 「指示詞（この・その・あの） + 空間名詞」の時間を示す指示詞は、以下のような規則に従うことを確認した。
 - ・ 「コ系」は、絶対時制・相対時制の両方の使い方があがるが、「ソ系・ア系」は絶対時制しか使わない。
 - ・ 「コ系」の時間を示す指示詞は、過去・現在・未来の三つの領域で使える。「ソ系」の時間を示す指示詞は、過去・未来の領域で使える。「ア系」は、過去の領域でしか使わない。
- ② 「指示詞（この・その・あの） + 空間名詞」の時間を示す指示詞には、時間を示す方向性がある。
- ③ 「指示詞（この・その・あの） + 空間名詞」の時間を示す指示詞（時制がある場合）は、指示詞が指す出来事と出来事の関係によって、いろいろに組み合わせることができる（例27と例28を参照）。「指示詞（この・その・あの） + 空間名詞」の時間を示す指示詞は使用する際に、基本的な原則がある（図一10を参照）。
- ④ 「指示詞（この・その・あの） + 空間名詞」の時間を示す指示詞（超時的なもの）は、本稿では③の時制がある場合の「指示詞（この・その・あの） + 空間名詞」の時間を示す指示詞の使用原則（図一10）に対して、超時的なものの「指示詞（この・その・あの）+ 空間名詞（先・後・前）」の使用原則を提案した（図一11を参照）。

5) 指示詞「これ・それ・あれ」+ 助詞（から・まで）の時間を指す指示詞の実例を集め、「現在・今」を発話時点にして、町田（1989）の時制についての定義を用いて、時制の視点から指示詞を指す時間と指示詞を指す事象・出来事と発話時点の関係をモデル化し、指示詞「これ・それ・あれ」+ 助詞（から・まで）の時制によっての使い分けを確認して、検証した。次のようなことが導き出される。

- ① 「指示詞（これ・それ・あれ） + 助詞」の時間を示す指示詞は、以下のような規則に従うことを確認した。
 - ・ 「コ系」は、絶対時制・相対時制の両方で使用できる。

学位論文要旨および審査要旨

- ・「ソ系・ア系」は、「コ系」に対して、絶対時制しか使わない。
- ・「コ系」の時間を示す指示詞は、過去・現在・未来の三つの領域で使える。
- ・「ソ系」の時間を示す指示詞は、過去・未来の領域で使える。
- ・「ア系」は、過去の領域でしか使わない。

- ② 「指示詞(これ・それ・あれ)+ 助詞(から・まで)」の時間を示す指示詞は、時間を示す方向性がある。「指示詞(これ・それ・あれ)+ 助詞(から・まで)」の時間を示す方向性は、対になる。時間の方向性について、どちらもある時点から未来の方向を指すが、「まで」は、時間的到達点を示す(図—14を参照)。「から」は、時間的出発点を示す。(時間の方向性を示すより、一語性が強い「過去・未来を含む幅のある「今」を示す「これから」と、未来を含む幅のある「今」を示す「これまで」など例外)。
- ③ 「指示詞(これ・それ・あれ) + 助詞(から・まで)」の時間を示す指示詞(時制がある場合)は、指示詞が指す出来事と出来事の関係によって、いろいろな組み合わせることができる(例47と例48を参照)。その出来事を除いて、変わらない基礎的なものはある(図—14を参照)。
- ④ 「指示詞(これ・それ・あれ) + 助詞(から・まで)」の時間を示す指示詞(超時的なもの)について、超時的なもの「指示詞(コレ・ソレ・アレ)+ 助詞(から・まで)」の使用原理を提案した(図—15を参照)。

以上にまとめたように、指示詞「コ・ソ・ア」は時制によって、使い分けがある。「コ」が出来事について、絶対時制と相対時制の両方の視点で見ることができるのに対して、「ソ・ア」は、絶対時制の視点でしか出来事を見ないことがわかった。つまり、「コ」ではある出来事を述べる際に、人は、無意識に出来事の視点を移動させながら、話していると考えられる。

しかしながら、指示詞と時間に関する指示詞「コ・ソ・ア」が「真の時間・仮定の時間」によって、使い分けられる可能性があるという課題が残されている。つまり、指示詞「コ・ソ・ア」が指す事象の時間が、「真の時間」であれば、「コ」を選んで使う傾向があり、それに対して、事象の時間は、「仮定の時間」であると捉えるときには、「ソ」を選んで使う傾向があると考えられることである。この規則の考察は、今後の研究課題になる。

論文審査結果の要旨

指示詞の研究は、先行研究では、現場指示・文脈指示・照応に関する研究が中心で、時間に関する研究はほとんどなかった。本論文では、指示詞「コ・ソ・ア」の時間に関する研究に正面から取り組んでいる。指示詞を①「指示詞+時名詞」(限定時間と非限定時間)、②「指示詞+空間名詞」、③「指示詞+助詞」の3つの場合に分けて考察するが、考察に当たってはそれぞれの事例を、先行研究にない独自の時制図を用いて細かく分析している。研究の結果、「コ」が絶対時制と相対時制の両方で使用できるのに対して、「ソ・ア」は絶対時制でしか使用できないということを始め、新たな知見が得られた。

[論文の特徴]

本論文には2つの特徴がある。その第1は指示詞を時間を指示する側面から捉えていることである。従来指示詞は空間的、心理的側面から研究されるのが普通であり、時間に関しては正面から扱われたことはなかった。本論文では指示詞「コ・ソ・ア」を、その関わる時間的名詞や助詞との関係において、独自の適切な分類のもとに考察を行い、結果として新知見を得ている。

第2の特徴は時間の適切な図示である。従来の時間に関わる研究ではS(発話時点)、E(出来事)、R(基準時点)の記号を用いて出来事間の時間的関係を図示することはあったが、これでは3点の時間的前後関係が捉えられるにすぎなかった。本研究では時間関係を「日本語構造伝達文法」の時相(テンス・アスペクト)の把握法、図示法に学んで発展させた独自の時制図により、絶対時、相対時、出来事の相対的長さ、指示詞等を細かく示すことができ、時間関係を直観的に把握できるようになっている。

本論文では、収集した事例に表現されている1つひとつの時間関係を分析し、図示による明示的な形でそれぞれの特徴を捉え、これに独自の適切な考察を加えている。

これが本論文の特徴である。

[論文の構成]

目次

1. 研究目的
2. 先行研究
 - 2-1. 指示詞に関する先行研究
 - 2-2. 時間と関係する先行研究
 - 2-3. 先行研究に対する本稿の見解
3. 研究方法
 - 3-1. 指示詞「こ・そ・あ」+ 時名詞についての研究方法
 - 3-2. 指示詞「この・その・あの」+ 限定時間(春・3月・曜日など)の研究方法
 - 3-3. 指示詞「この・その・あの」+ 非限定時間(とき)の研究方法
 - 3-4. 指示詞「この・その・あの」+ 空間名詞(前・後・先など)の研究方法
 - 3-5. 指示詞「これ・それ・あれ」+ 助詞(から・まで)の研究方法
4. 結果と分析
 - 4-1. 「指示詞+時名詞」の限定時間と非限定時間の時制の使用率の調査結果と分析
 - 4-2. 指示詞「この・その・あの」+ 限定時間(春・3月・曜日など)の結果と分析
 - 4-3. 非限定時間としての「このとき・そのとき・あのとき」の結果と分析
 - 4-4. 指示詞「この・その・あの」+ 空間名詞(前・後・先など)の結果と分析
 - 4-5. 指示詞「これ・それ・あれ」+ 助詞(から・まで)の結果と分析

学位論文要旨および審査要旨

5. まとめ
6. 今後の課題
資料
参考文献

[論文各章の内容]

1. 研究目的

指示詞「コ・ソ・ア」について先行研究でなされてきた研究は、現場指示・文脈指示・照応の研究などであり、時間に関する研究は進んでいるとは言えない、と述べ、本論文では、指示詞「コ・ソ・ア」の時間に関する指示範囲や使い分け、用法などを明らかにしつつ、その本質を解明する、とし、指示詞を①「指示詞+時名詞」(限定時間と非限定時間)、②「指示詞+空間名詞」、③「指示詞+助詞」に分けて考察する、としている。

2. 先行研究

指示詞に関する先行研究として、主要な6研究者の研究を取り上げ、本研究との関わりから論じている。次に、指示詞とは直接関係ないが、時間について研究した先行研究として2研究者の研究を取り上げて論じたのち、「今」についての3研究者の考え方に触れている。

指示詞と時制の関係について研究したものは、断片的なものは別として、1件あるのみで、決して多いとは言えないとしている。

本論文では基本的な理解は先行研究と異ならないが、正面から指示詞と時制の関係を研究するために、指示詞と時制の関係を独自の時制図で示して考察することを述べている。また、「現在・今」を扱うための必要性から、先行研究にない2種類のものに分けることを述べている。現実の発話時としての現在を「げんざい・いま」と表示し、それ以外の記録内現在や設定現在などを「ゲンザイ・イマ」と表示する。これとは別に、現在を点として捉える場合と時間的幅と捉える場合の2つに分けている。後者の幅と捉える場合はさらに、過去幅を持つもの、過去・未来幅を持つもの、未来幅を持つものの3種類に分けている。分けられたそれぞれが記号によって区別され、図示しやすくなっており、直観的理解もしやすくなっている。

3. 研究方法

研究データとしての時間指示詞使用例文を青空文庫、Yahoo のブログ、電子版朝日新聞から収集することを述べ、町田(1989)の時制についての定義に基づいて分類することをまず述べている。続いて、例文に見られる時制関係は例文ごとに独自の時制図で精密に示す、としている。こうすることで、指示詞は時制によって使い分けがあるという見解を検証する、と述べている。そのあと、論文において使用する文字・記号の意味を説明している。

次に、指示詞「コ・ソ・ア」と組み合わされる「時名詞」、「空間名詞」、「助詞」それぞれの場合の研究方法を述べているが、「時名詞」の場合は「限定時間名詞」と「非限定時間名詞」の2種類に分類するとしている。前者「限定時間名詞」は「春、日曜日、3月」のように客観的に時間的区切りが定まっている名詞であり、後者「非限定時間名詞」は「とき、ころ、間」のように主観的に時間的区切りが決められる名詞である、とする。

4. 結果と分析

4-1. 「指示詞+時名詞」の限定時間と非限定時間の時制の使用率の調査結果と分析

「指示詞+時名詞」のデータを過去・現在・未来という範疇におい

て分類し、「コ・ソ・ア」の使用数と使用率を限定時間と非限定時間に分けて調査した。その結果、次の2つの結論を得た。

- 限定時間の指示詞と非限定時間の指示詞の使用領域の分布は同じである。いずれも主に「過去」で使われている。「この系」は「過去・現在・未来」の三つの領域で使われ、「その系」は「過去・未来」で使われる。「あの系」は、「過去」にしか使われない。
- 限定時間の指示詞は、「コ系」が、「ソ系・ア系」より多く使われる傾向があり、非限定時間の指示詞は、「ソ系」が、「コ系・ア系」より多く使われる傾向が見られる。

4-2. 指示詞「この・その・あの」+ 限定時間(春・3月・曜日など)の結果と分析

指示詞が限定時間名詞とともに使用される場合(「この・その・あの+春、この・その・あの+3月、この・その・あの+(日・月・火・水・木・金)曜日」)の実例を、絶対時制・相対時制の視点から分析・考察し、結果として、限定時間で使用される「この」は絶対時制の過去・現在・未来で使用され、「その」は過去・未来で、「あの」は過去で使用されることが明らかになった、としている。また、「この」は相対時制で出来事を捉えることも可能ではあるが、収集したデータの中になかったことから、あまり使用されないのではないかとしている。

4-3. 非限定時間としての「このとき・そのとき・あのとき」の結果と分析

指示詞が非限定時間名詞「とき」とともに使用される場合(「このとき・そのとき・あのとき」)の実例を、絶対時制・相対時制の視点から分析・考察し、「このとき」は絶対時制・相対時制で使用するが、「そのとき・あのとき」は絶対時制でのみ使用する等を明らかにしている。また、限定時間と同様、「コ系」は過去・現在・未来で使用され、「ソ系」は過去・未来で、「ア系」は過去でのみ使用されることが明らかになったとしている。

考察ののち、結果を3つの図(絶対時制図・相対時制図・反復図)にまとめている。

4-2, 4-3 では日本語構造伝達文法理論の時相図を参考にして独自に作成された時制図を用いて考察を行っていることに特徴がある。その図は、先行研究で使用している発話時と事態の関係を単なるS(発話時点)、E(出来事)、R(基準時点)などの記号で示した図よりかなり直観的に理解しやすい形で示すことができるようになって

いる。このように時制図を用いて時間関係を理解しやすく論を進めていること、結果的に新知見を得ていること、結論を3モデル図に集約していることなど、先行研究にない特徴として評価できる。

4-4. 指示詞「この・その・あの」+ 空間名詞(前・後・先など)の結果と分析

指示詞が、時間の意味で使用される空間名詞「先・前・後」とともに使用される場合、つまり「指示詞(この・その・あの)+空間名詞(先・前・後)」の形になる場合について、収集した実例それぞれの時制を1つひとつ図で示し、その異同が形として把握できるようになっている。これらの形をとおして考察した結果、コ系は絶対時制・相対時制の両方で使用するが、ソ系・ア系は絶対時制でしか使用しないこと、また、コ系は過去・現在・未来の三領域で使用するが、ソ系は過去・未来の領域に、ア系は過去の領域に限定されることなどが確認できた。

最後に、時間としての「空間名詞」に伴う指示詞の使用の全体が一目で分かるよう、時制のある場合の4図と超時的な場合の1図、計5つのモデル図に集約している。

以上のような、図による分析、指示詞の時制上での使用の確認、モデル図への集約等は、いずれも独自の研究の成果として評価でき

る。

4-5. 指示詞「これ・それ・あれ」+ 助詞(から・まで)の結果と分析

指示詞(指示代名詞)が時間に関わる助詞「から・まで」とともに使用される場合、つまり「指示詞(これ・それ・あれ)+助詞(から・まで)」となる場合を扱う。それぞれの例文について分析し、図で異同を示したのち、最後にそれらの関係を時制のある場合と超時的な場合の2つの図にまとめている。これも先行研究にはない新たな知見を示す図であり、直観的に理解しやすいものとなっていて、評価できる。また、コ系、ソ系、ア系の指示詞の使用分布についてはすでに述べてきた傾向と同じであることを述べている。これは全体的に一貫しているものであることが判明したと考えられる。加えて、「から・まで」が時間的方向性を持つことについての考察を行っている。

5. まとめ

上述の内容を改めて簡潔にまとめている。本研究により、「コ」が絶対時制と相対時制の両方で使用できるのに対して、「ソ・ア」は絶対時制でしか使用できないことが明らかになったことなどを述べ、さらに、各種の時間指示詞の使い分け、用法などが明らかになったと述べている。

6. 今後の課題

今後の課題として、新たに獲得した仮説、「コ・ア」が「真の時間」を指示するのに対して「ソ」が「真の時間・仮定の時間」の両方を指示するという仮説を検証する必要があると述べている。

資料

4-2 の限定時間、非限定時間に関する実例を資料として集めている。

[研究史における意義]

先行研究では、指示詞は空間的、心理的側面から研究されるのが普通であり、時間に関してはほとんど扱われたことがなかった。本論文は指示詞の時間的側面を正面から研究し、成果を得ている。

また、先行研究の時間に関する研究では、S(発話時点)、E(出来事)、R(基準時点)の記号を用いた簡単な図示が行われていたが、本論文では独自の時制図により、絶対時、相対時、出来事の相対的長さ、指示詞等を細かく示すことができおり、時間関係を直観的に適切に把握できるようにしている。

研究史においては、この2点が意義あるものとして評価できる。

[評価]

以上のように、本論文は指示詞について従来ほとんど扱われることのなかった時間的側面を新しい方法で研究し、新知見を得ており、内容的にも研究史的にも意義の認められる論文であると評価できる。このため、論者である董昭君氏に博士号授与がふさわしいとの判断に至った。

学位論文要旨および審査要旨

〔博士（学術）〕

氏名 山内 美穂

〈学位〉種類	博士(学術)	論文項目	「並列」機能を持つ助詞の談話における働き
授与番号	博甲国第 33 号		—「単独」用法に着目して—
授与年月日	平成 26 年 9 月 30 日	論文審査員	主査 鄭 英淑
授与の条件	学位規程第 5 条		副査 大堀 壽夫 金田一 秀穂

学位論文の要旨

本論では、「トカ」、「タリ」、「シ」など現代日本語の「並列」機能を持つ助詞が、談話において「並列」ではなく「単独」で使用される場合の機能を調査・記述する。

「並列」機能を持つ助詞は、二つ以上の語や句、あるいは節を対等な関係で並列して結び付ける機能を持つ。しかし、現代日本語の特に話し言葉において、これらのいくつかはしばしば二つ以上の語・句・節などを並列に結合せず、一つだけの語・句・節の後ろにつく形式で使用される。このような形式を本論では「並列」機能を持つ助詞の「単独」用法と呼ぶ。「並列」機能を持つ助詞が「単独」で使用されることにより、単なる「並列」されるべき要素の省略ということでは説明できない機能が談話中にもたらされている。例えば、(1)では「タリ」が「単独」で使用されている。

(1)結婚って、したいしたいって言うてる人に限ってなかなかできなくて、まだしなくてもいいとか、興味が無い人が、突然結構しちゃうたりしませんか？(Yahoo!知恵袋)

この文脈で「結婚しちゃうたり」の他に「タリ」で並列できる要素があるだろうか。文頭で「結婚って」と主題が提示されているため、「結婚しちゃうたり」の後に「～たり」の横に「～たり」で並列できる要素は他に考えにくい。ではこれは「タリ」並列の省略用法だとはいえない。(1)のような「単独」用法が単なる「並列」すべき要素の省略だけでないとするれば、一体「タリ」の「単語」用法はどのような機能を談話中にもたらしているのだろうか。

上述したような「単独」用法については、これまでいくつかの研究で論じられてきた。しかし、いずれもそれぞれの助詞について個別に分析が行われているものであり、「並列」機能という枠の中で体系的に現象を捉えるという研究は見当たらない。また、「単独」用法は、談話の中でも書き言葉よりむしろ、話し言葉や話し言葉に近いスタイルの書き言葉で見られる現象であるにも関わらず、話し言葉データを分析に使用した先行研究は多いとはいえない。

本論では日本人母語話者 100 人分の自由会話データを使用し、「並列」という枠組みの中で体系的にこの現象を捉え、「並列」機能を持つ助詞の「単独」用法が談話中にもたらす機能を分析する。

本論の対象となる助詞は「トカ」、「ヤラ」、「ダノ」、「ナリ」、「タリ」、「シ」である。これらの形式は「～トカ～(トカ)」などの形式で語・句・節を並列できる他、「～トカ」のような形式で「単独」用法が可能である。「ト」、「ヤ」、「カ」、「ニ」も同じく「並列」機能を持つ助詞だが、本論でいう「単独」用法はない。「トカ」、「ヤラ」、「ダノ」、「ナリ」、「タリ」、「シ」と「ト」、「ヤ」、「カ」、「ニ」との間には結びつきの強固さという点で違いがあると考えられる。また歴史的に見ると、「ト」、「ヤ」、「カ」、「ニ」が早いものは 8 世紀から遅くても 12 世紀には既に「並列」機能を有していたのに対し、「トカ」、「ヤラ」、「ダノ」、「ナリ」、「タリ」、「シ」は比較的長い間「並列」とは全く異なる機能を有しながら、「タリ」は、15 世紀頃、「ノ(ダノ)」は 16 世紀末、「ヤラ」、「シ」が 18 世紀、「ナリ」、「トカ」は 19 世紀になって「並列」機能を獲得している。

「モ」については、現代日本語の「並列」機能と、「一例を提示しながら同類を暗示」する機能とが、既に 10 世紀頃の文献に見られる。この「一例を提示しながら同類を暗示」する「モ」を寺村(1993)では「取り立て助詞」と呼び、その機能を「文中のある部分についてその部分を際立たせ、その結果生じる影の存在を暗示し、その「影」との対比によって、その文の表すトに特別の意味をもたせることにある」としている。「モ」も「並列」機能を持つ助詞の一つであり、「モ」の「一例を提示しながら同類を暗示」機能は、本論で問題としている「トカ」、「ヤラ」、「ダノ」、「ナリ」、「タリ」、「シ」の「単独」用法と深いつながりがあると思われる。

では、「トカ」、「ヤラ」、「ダノ」、「ナリ」、「タリ」、「シ」は、話し言葉においてどの程度「単独」使用されているのだろうか。本論では、10 代～70 代の日本語母語話者 100 人による 2 人 1 組の自由会話データ(録音時間は平均 15 分)を使用し、調査を行った。表 1 は話者 100 人の「トカ」、「ヤラ」、「ダノ」、「ナリ」、「タリ」、「シ」の全用例を抽出し、「単独」用法と「並列」用法に分け、それぞれが用例全体に占める割合を示したものである。表 1 からは、会話では「トカ」、「タリ」、「シ」は高い比率で「単独」使用されていることがわかる。一方、「ヤラ」、「ダノ」、「ナリ」は会話で使用されることは少なく、ほとんどが「並列」用法であることが見て取れる。

表 1 「トカ」「ヤラ」「ダノ」「ナリ」「タリ」「シ」のトークン数と各用法が全用例に占める割合

	トカ		ヤラ		ダノ		ナリ		タリ		シ	
	トークン数	割合	トークン数	割合	トークン数	割合	トークン数	割合	トークン数	割合	トークン数	割合
単独	1537	88.7%	0	0.0%	1	25.0%	0	0.0%	165	80.5%	257	74.7%
並列	196	11.0%	3	100.0%	3	75.0%	5	100.0%	40	19.5%	87	25.3%
計	1733		3		4		5		205		344	

学位論文要旨および審査要旨

この調査結果について本論では次のような考察を行っている。

「トカ」、「ヤラ」、「ダノ」、「ナリ」、「タリ」、「シ」は全て「モ」と同様に、「～トカ～トカ」、「～モ～モ」などの形式で要素を並列することができる。この形式において並列する要素をa、b、c…と表し、「トカ」、「ヤラ」、「ダノ」、「ナリ」、「タリ」、「シ」、「モ」のそれぞれをXと表すとすれば、[a X b X …]という形式でこれら助詞の「並列」用法を示すことができる。さらに、これら助詞の「単独」用法は全て[a X]という形式で示せる。

Langacker(1987, 1999 他)は、語彙だけでなく語彙が結合した複合表現のレベルにも何らかの意味が結びついており一定の記号的性質が認められるとしている。本論では、「一定の形をもった文法上の構造が一定の慣習的な意味をもつ」という構文(Construction)の考え方にに基づき、[a X b X …]と[a X]をそれぞれ後述するような一定の意味が結びついている。

「トカ」、「ヤラ」、「ダノ」、「タリ」、「ナリ」、「タリ」、「シ」の現代語の「並列」については、寺村(1984, 1991)、森山(1995)が指摘しているように、いずれも「ある集合の成員の一部を二つ以上並べる」という共通した意味を持っている。つまり「aトカbトカ…」「aヤラbヤラ…」…では、aもbもc…も「談話の場における集合の成員の一部」である。この場合の「集合」は固定されたものではなく、談話の場に生じるアドホックな集合である。これらをここでは一つの構文と捉え、(2)のように記述する。

(2) [a X b X …]構文

音韻極: [a X b X …] (X=トカ or ヤラ or ダノ or ナリ or タリ or シ)

意味極: [ある集合の成員の一部を二つ以上述べる]

「トカ」、「ヤラ」、「ダノ」、「ナリ」、「タリ」、「シ」のうち「トカ」、「タリ」、「シ」は談話で使用される頻度が高い。談話で多用されるうち、一つを提示しただけで、情報の送り手と受け手の間に、「二つ目以降にも同じ集団に属する成員がある」という共通理解が働くようになり、二つ目以降を提示しなくてもよくなる。このことにより、既に安定した言語ユニットである[a X b X …]構文から、「ある集合の成員の一部を提示する」という共通するスキーマが抽出され、新たに(3)に示す[a X]構文へと拡張し、さらに「～トカ」、「～タリ」、「～シ」の使用事例の蓄積によって[a X]構文も定着したと考える。

(3) [a X]構文

音韻極: [a X] (X=トカ or ヤラ or ダノ or ナリ or タリ or シ)

意味極: [aを含む「集合」の存在を含意し、aの他にも「集合」の成員が存在することを暗示する]

一方で、「ヤラ」、「ダノ」、「ナリ」は今回の調査の結果からは会話ではあまり使用されないと考えられ、現状の使用状況が続く限りは上記のような[a X]構文の定着は起こりにくいと見ている。

「トカ」、「ヤラ」、「ダノ」、「ナリ」、「タリ」、「シ」の「単独」用法は、(3)で記述した共通の構文の意味を持つ一方で、更に個別に見るとそれぞれ特有の機能が観察された。それぞれ、頻出するパターンと具体的な会話データを示し、「モ」の「取り立て」用法とも比較しながら考察を加える。

例えば、「トカ」は「並列」では「会話の場で話者の意識に浮かんだ「集合」から候補例を二つ以上あげる。」機能を持つが、これが「単独」使用されると、一種の婉曲表現を可能にしたり、「トカ」の前に置かれた要素が属するカテゴリを示したり、概数を示す機能も果たしている。

「タリ」は「並列」では「複数の事態や動作を並べて例示する」機能を持つが、これが「単独」用法になると、複数の事態や動作の中から一つだけを取り出し、その他の事態や動作を暗示することが可能になり、一種の婉曲表現の他、事態の発生可能性や意外性を示したり、冗談表現が可能になる。

また、本研究の会話データの分析を通して、これまで文レベルの分析では見えなかった「シ」の相互作用的な機能が確認された。本論では特に若い世代に多い「シ」の「単独」用法が会話の中でどのような機能を果たしているかにも説明を加える。その他、「ヤラ」、「ダノ」、「ナリ」についても会話データや他の談話データを用いて、その「単独」用法の機能を考察する。

最後に「トカ」、「ヤラ」、「ダノ」、「ナリ」「タリ」、「シ」の「単独」用法は、「並列」機能から拡張した新たな働きであり、現代日本語の対話における一つのポジティブな対人ストラテジーとなっていることを示す。

【引用文献】

Langacker, Ronald W(1987) *Foundations of cognitive grammar Vol.1:Theoretical prerequisites*. Stanford:Stanford University Press.

Langacker, Ronald W(2000) "A Dynamic Usage-based Model." In: Barlow and Kemmer, 1-63

寺村秀夫(1984)「並列的接続とその影の統括命題—モ、シ、シカモの場合—」日本語学 pp.67-74, 明治書院

寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版

森山卓郎(1995)「並列述語構文考—「たり」「とか」「か」「なり」の意味・用法をめぐって」『複文の研究(上)』くろしお出版

論文審査結果の要旨

日本語の並列機能を持つと言われている助詞「モ」「トカ」「ヤラ」「ダノ」「ナリ」「タリ」「シ」が、現代語では単独で使われる場合があり、その現象に着目して、それぞれの機能用法について考察した。

[論文の特徴]

それぞれ並列の助詞は、規範的に、並列することとして扱われているのだが、それらが単独で使われている用例が現代語に溢れて

おり、無視できない。

山内は、レイコフ等の構文理論にもとづき、単独で使われるこれらの助詞の含まれる構文を仮定し、並列から単独への用法の説明を、個々別々に考えるのではなく、寺村[1991]などを援用し、統合的、全体的に説明しようとして試みている。

現代語コーパスを資料として、理論を実証し、きわめてわかりやすく説得的な議論を展開し、妥当な結論を得ている。

学位論文要旨および審査要旨

[論文の構成及び内容]

全 114 ページ。

研究目的・先行研究・研究方法・結果と分析・今後の展望によって構成され、論理的、明晰である。

先行研究として、寺村秀夫[1984][1991]、森山卓郎[1995]、中俣尚己[2009]を挙げて、現代語における並列助詞の扱いについて研究の全体を概観している。また、此島正年 [1966]をはじめとして、岩田彩志、京健治などの通時的な研究にも目配りされている。

「トカ」「タリ」「シ」などの単独用法の個々の研究に触れた後、山内は、並列用法を持つ助詞のうちで単独に使用可能なもの「モ」「トカ」「ヤラ」「ダノ」「ナリ」「タリ」「シ」を研究の対象にした。

用例は会話コーパスにかぎられている。ホッパー[1998]の創発的文法の考え方、すなわち文法は日常的な使用によって形作られていく、という考え方に基づくものである。

データは、国立国語研究所[2008]『日本語話し言葉コーパス 2004・第 2 版』、宇佐美まゆみ監修[2011]『BTS』による日本語話し言葉コーパス(トランスクリプト・音声)2011 年版』さらに、山内の採集したデータが 6 会話ある。話者は 100 人、各世代に均等に分布しており、現代語データとして妥当性が高いと考えられる。

「モ」については、並列、累加、ぼかし、極限の機能を、日本語記述文法研究会[2009]に基づいて説明した。

「トカ」は、並列[集合の代表例]、概数、集合を示す、動詞の名詞化による例示、不確定引用があり、「モ」と同様の言語化されなかった「影」を含意するとした。

「ヤラ」は、並列[集合の代表例]、代表例以外の候補の暗示、対立する項目を上げる慣用句的な用法、また「モ」と同様の言語化されなかった「影」を含意するとした。

「ダノ」は、並列[集合の代表例]、代表例以外の候補の暗示のほか、提示される要素が話し手や書き手にとって望ましくない、又価値がないものと扱われる傾向があることを述べ、また「モ」と同様の言語化されなかった「影」を含意する。

「ナリ」は、会話の場で話者の意識に浮かんだ集合から候補例を二つ以上挙げる。集合の代表例とともに、ほかにもあることを暗示する。いずれにせよ、用例が極めて少なかった。

「タリ」並列、[会話の場で話者の意識に浮かんだ『集合』から候補となる事態、側面を取り出して二つ以上挙げる。]、[会話の場で話者の意識に浮かんだ『集合』から候補となる事態、側面をひとつだけ取り出して、それ以外の事態や側面の存在を暗示する。話者の伝えたい事態を言表しながら、同時にそれと相反する話者の概念も暗示する。この機能により「可能性」「意外性」「冗談」「控え目表現」などが生まれる。また「モ」と同様の言語化されなかった「影」を含意する。

「シ」二つ以上の節を並列し、前後の節を繋ぎ、話者自身又他者の直前か少し前の発話情報に別の情報を並列的に累加する。また単独でも話者の主張を補強する。単独では、その他の「シ」節や話者の主張の存在も暗示する。「モ」と共通のものとして、少し前の発話に、同類の情報を累加し、聞き手に影を浮かばせる。

それぞれの各論は、全体的な視野の中での位置づけが明確であり、理解しやすい。論点が整理されている。

さらに、これら並列助詞の、並列用法における同異、単独用法における同異をまとめて示した。

[研究史における意義]

並列助詞の単独用法については、今まで個別に取り上げられる

ことはあっても、このように全体的な取りあげられ方はされたことがなかった。全体的な視点に立つとき、個々を見ていたのでははっきりしない点が明らかになり、それぞれの相違点だけでなく共通点も明らかになった。

データを口語会話に絞ることで、生き生きとした現代語会話の文法が解明され、創発的文法の現場が示された。

「タリ」「シ」などの分析については、まだ不十分な点が残るが、いずれにせよ、今後並列助詞について分析しようとする研究は、本論文を無視して進むことはできないだろう。

[評価]

本論文は、すでに山内が、日本語教育学会、日本語文法学会また認知言語学会などにおいて、発表してきた論文に基づいており、外部での厳格な審査を通ってきたものである。

内容的には、それらをまとめ集大成したものと言える。これからさらに研究を進めるうえでも、この研究の経験によって得られた科学的な方法論をもとにして、確実に進めていくことが出来るだろう。

本研究科において博士号を与えるにふさわしい論文であると言える。審査者 3 名の全員一致の結論である。

〔博士（学術）〕

氏名 車 穎

〈学位〉種類	博士(学術)	論文項目	中日通訳活動におけるリスクベース分析	
授与番号	博甲国第 34 号			
授与年月日	平成 27 年 3 月 31 日	論文審査員	主査	塚本 尋
授与の条件	学位規程第 5 条		副査	塚本 慶一 修 剛

学位論文の要旨

本稿の序章では、中日通訳活動におけるリスクベース分析を研究する問題意識(切っ掛け)について説明した。中国人通訳学習者として、欧米の諸学説や理論研究をはじめ、更に中日両国における通訳研究文献を収集し、研究する中で、通訳活動は様々なリスクを伴う知的活動であると認識するようになった。但し、通訳活動におけるリスクの所在、そしてリスクの角度から通訳活動を評価する概念が成り立つかどうかについてほとんど論じられていない現状に気づいた筆者は本研究を通じて「リスク」の概念を取り入れ、「リスクベース分析」の評価理念と方法を提示したい。

第 1 章において、まず中国語における「翻訳」の概念についてお欧米、日本と中国の諸観点を紹介し、更に「通訳と翻訳」の相関性と相違性を取り上げて説明した。続いて、本研究のテーマである通訳について「逐次通訳と同時通訳」の職業化までの歴史に触れつつ、より多くのリスクを伴う「同時通訳」に特化して中国通訳業界における諸先行研究を説明した。具体的に「同時通訳」の形式に関して三つのパターンに関する観点を紹介し、更に逐次通訳と比べて同時通訳の優位性、同時通訳向けの専用設備の使用、通訳の品質基準や同時通訳者が備えるべき資質などについて先行研究を説明しながら筆者の見解を論じた。後半の理論研究において、欧米、日本と中国の通訳研究を参照しつつ、中国における同時通訳研究の発展と方向性について論じた。その中に、「通訳者の記憶能力」、「(通訳者)発音のコントロール」、「通訳者の能力評価」のような通訳者自身と密に係る内容もあれば、「省略について」と「ミスについて」のような技術的な内容も含まれている。第 1 章の最後に、高彬と柴明頴(2010)が指摘した中国における同時通訳研究の特徴と問題点を挙げ、中国では欧米の通訳理論に対する研究はまだ発展させる必要があること、通訳の技法とストラテジーの使用がだんだん通訳研究の主流となりつつあるといった点に注目したい。

第 2 章では、本研究で提唱したい「リスクベース分析」の基本的な考え方について説明した。一つ目は「利益関係(者)」に関する考え方である。通訳活動は通訳者のみならず、会議の主催側、発言者、出席者(聞き手)、機械の設置・修理業者、通訳者を手配するエージェント、マスメディアなど多くのセグメントからなっており、即ち通訳活動は通訳者を主体とし、多くの利益関係者を取り巻く活動であると指摘した。二つ目は経済学や経営学上での「リスク」という概念、また保険会社でのリスクマネジメントについて説明し、通訳活動にも「リスク」の概念を導入してみようと提案した。この第 2 章では新しい観点(リスクベース)から、通訳活動をどう評価すべく、時代と共にどういう点で改善していくかについて、大きな方向性を提示した。即ち、通訳活動に対して、リスクという概念の確立、リスクの洗い出し、更に定量的または定性的な分析、通訳者のプロフィール作成、通訳者のリスク選好などについて十分に継続して研究する価値があると指摘した。

第 3 章では、第 2 章で提示したリスクの概念に基づき、通訳活動におけるリスクの所在について論じてみた。リスクの所在について、すべての可能性を網羅して洗い出すことを目的とせず、いくつの代表的なリスク(種類)に絞ることに留め、リスクの観点から通訳活動を分析することに主眼を置いて説明した。リスクの種類と形態について、十分に検討する余地がある。本章では主に「同時通訳形式」、「非言語的情報」と「言語的情報」におけるリスク、更に「発言者のミス」によるリスクについて事例を挙げつつ説明した。そして、リスクの所在をはっきりと認識することが重要で、それ通訳者の責任のみならず、通訳活動を取り巻く多くの利益関係者にも理解してもらう必要があると筆者が指摘した。

第 4 章では、中国中央テレビ局が同時通訳を介して、東日本大震災の状況を生中継した際の通訳事例に対して、実際にリスクベース分析を実施してみた。通訳事例を分析する中で、重要なリスクを洗い出し、誘発要素とそれによる影響、リスク回避するためのストラテジーなどについて詳しく論じてきた。例えば 4.2 節で取り上げた冒頭 3 句における「追いかけて」で通訳者は突然に 13 秒間の待機時間に遭遇したが、結果的に有効なストラテジーを駆使して何とか無事に通訳(追いかけて)に成功した。リスクベース分析の観点からすれば、「13 秒間の待機」が引き起こすかもしれないリスクをはじめ、セグメント(利益関係者)によって誘発されたリスク、通訳活動への影響、通訳者によるストラテジーの有効性など多くの要素について論じ、様々なリスクの所在を洗い出すことに努めた。これらのリスクの洗い出しとリスクの度合いに対するアセスメントは通訳活動(特に通訳者)のパフォーマンスを向上させるのに役立つと確認している。更に、4.3 節の「ミスによるリスク」で通訳者が自ら犯したミスについてそれぞれ「ミクロ」と「マクロ」の角度から分析してみた。「ミクロ」分析では大きく二つの観点を論じてきた。一つは「問題の引き金」に関する論述である。もう一つは「集中力配分」という同時通訳の固有リスクに関する内容だ。

「マクロ」分析では「ミスを訂正するかどうか」と「ミスを訂正するために駆使したストラテジーの有効性」の観点から、独自の採点表を提案した。「ミクロ」分析は主に通訳者が犯したミスに対して、その内在的な要因(定性的な面)を突き止めることに注目していたが、「マクロ」分析は通訳者が犯したミスに対して、通訳者が取った行動を定量的に分析するものである。4.4 節と 4.5 節は同時通訳活動の中で通訳者が自ら取ったストラテジーによって被るリスクについて説明した。最後の 4.6 節は「理解の乖離」という大きなテーマについて論じてきたが、「自己モニタリング能力の低下」や「ロジック関係の乖離」などの要素は同時通訳活動の中で通訳者を交替させる重要な参考指標にすべきだと提示した。

今後の課題について、リスクの所在をより深く、より広く探求する必要がある。また、それ以上に重要なのは、このリスクベース分析を通じて、通訳者のパフォーマンスをより公正に評価できる体系づくりを実現していきたい。つまり、通訳者が通訳活動を終えた後、第三者によって評価される必要がある。その第三者の評価機関は当該通訳者のパフォーマンスの妥当性について監査とランク付けが実施できる。そして本稿で論じたり

学位論文要旨および審査要旨

リスクベース分析がそういった評価システムの構築において重要な参考になることを筆者が期待する。

論文審査結果の要旨

車穎氏より提出された博士學位請求論文「中日通訳活動におけるリスクベース分析」は、欧米の通訳理論研究の最新成果を踏まえて、同時通訳を中心に、中日・日中の事例を考察し、リスクベース分析に基づく評価体系の構築を提案しようとするものである。

[論文の構成]

本論文の構成は、論理的で分かりやすく、目次 3 ページ、本文 106 ページ、付表と参考資料 91 ページ、計 200 ページでまとめられている。論文は次の各章により構成されている。

序章

- 0-1 問題意識
- 0-2 同時通訳プロセス・モデルに関する仮説の提示
- 0-3 研究方法
- 第1章 通訳に関する先行研究
 - 1-1 中国語における「翻訳」とは
 - 1-2 「通訳」と「翻訳」
 - 1-3 通訳——逐次通訳と同時通訳
 - 1-4 同時通訳
 - 1-4-1 パターン
 - 1-4-2 優位性
 - 1-4-3 設備の使用
 - 1-4-4 通訳の品質基準
 - 1-4-5 同時通訳者が備える資質
 - 1-4-6 理論研究
 - 1-4-6-1 西欧研究文献に関する統計
 - 1-4-6-2 中日両国における同時通訳研究文献に関する統計
 - 1-4-6-3 中国における同時通訳研究の発展と方向性
 - 1-4-6-3-1 中国同時通訳研究が注目している西欧通訳理論
 - 1-4-6-3-2 「省略」について
 - 1-4-6-3-3 通訳者の記憶能力
 - 1-4-6-3-4 「ミス」について
 - 1-4-6-3-5 通訳者発音のコントロール
 - 1-4-6-3-6 通訳者の能力評価について
 - 1-4-6-3-7 中国における同時通訳研究の特徴と問題点

第2章 「リスクベース」分析の考え方

- 2-1 「利益関係」の考え方
- 2-2 「リスク」——言語面での意味合い
- 2-3 「リスク」——経済学・経営学における概念
- 2-4 リスクの洗い出し

第3章 通訳活動におけるリスクの研究

- 3-1 通訳形式におけるリスク—逐次通訳と同時通訳を比較
- 3-2 非言語的情報におけるリスク
 - 3-2-1 なまりが分かりにくい
 - 3-2-2 メリハリがつかない
 - 3-2-3 話速の速さ
- 3-3 言語的情報におけるリスク

- 3-3-1 語彙とそのロジック
- 3-3-2 センテンスとそのロジック
 - 3-3-2-1 「主語+多数(目的語+述語)」の構造
 - 3-3-2-2 主語前の修飾内容の情報量が大きい場合
 - 3-3-2-3 情報量が少ない・複雑な述語部分
- 3-3-3 段落とそのロジック
- 3-4 発言者のミスによるリスク
- 第4章 同時通訳事例(日→中)に対するリスクベース分析
 - 4-1 研究事例の選別および説明
 - 4-2 冒頭の3句における「追いかける」
 - 4-3 ミスによるリスク
 - 4-3-1 リスクベース分析—「ミクロ」角度
 - 4-3-2 リスクベース分析—「マクロ」角度
 - 4-4 単一方向同時通訳活動における「ミス」リスク
 - 4-5 ストラテジーのオペレーションリスク
 - 4-6 SLテキストに対する「理解の乖離」
 - 4-6-1 自己モニタリング低下によるリスク
 - 4-6-2 漢字語彙によるリスク
 - 4-6-3 ロジック関係の乖離によるリスク

おわりに

参考文献

付表

添付資料

[論文の概要]

本論文は、中国における中日通訳研究に立脚し、日本や欧米において主流をなす研究を分析し、中日通訳に対する研究の現状と課題を論じたうえで、「リスク」をベースにした評価方法の構築を視野にいれて、通訳における「リスク」の分析をしたものである。

[各章の概要]

序章では、中日通訳活動におけるリスクベース分析を研究する問題意識について説明している。欧米の諸学説や理論研究や中日両国における通訳研究文献を渉猟し研究する中で、筆者は、通訳活動は様々なリスクを伴う知的活動であると認識するに至り、さらに、リスクの角度からの分析・研究が未踏の分野であると気づくに至った、と述べている。

第1章において、通訳に関する先行研究をまとめている。通訳翻訳の概念についての欧米、日本、中国の諸観点を紹介し、同時通訳についてはその優位性や設備の状況、通訳者に求められる資質などにも言及している。さらにここ数十年の研究成果について、現在の中国における同時通訳研究の特徴と問題点を指摘している。

第2章では、本研究で提唱する「リスクベース分析」の基本的な考え方について説明し、この観点から通訳活動の評価やその改善について方向性を提示している。通訳活動は通訳者のみならず、会議の主催者、発言者、出席者(聞き手)、機械の設置・修理業者、通訳者を手配するエージェント、マスメディアなど多くのセグメントを包括する。通訳活動は通訳者を主体とし、多くの利益関係者を取り巻く活動である、とみる。各セグメントの利益関係にマイナスの影響をもたらす「リスク」に係る分析を「リスクベース分析」と呼ぶ、としている。通訳活動に対して、リスクという概念の確立、リスクの洗い出

学位論文要旨および審査要旨

し、更に定量的または定性的な分析、通訳者のプロフィール作成、通訳者のリスクに対する選好などについて継続して研究する価値があると指摘している。

第3章では、第2章で提示したリスクの概念に基づき、通訳活動におけるリスクの所在について論じている。いくつかの代表的なリスクの種類に絞って提示し、この観点からの通訳活動の分析の有用性を指摘している。「同時通訳形式」「非言語的情報」「言語的情報」「発言者のミス」などの状況下でのリスクについて事例をあげて説明し、リスクの所在をはっきりと認識することが重要で、それは通訳者の責任のみならず、通訳活動を取り巻く多くの利益関係者にも理解してもらう必要がある点を力説している。

第4章では、東日本大震災発生時の状況を伝える NHK のニュース報道を、中国中央テレビ局(CCTV)が同時通訳を介して中国国内向けに生中継した際の通訳事例に対して、実際にリスクベース分析を実施している。さまざまなリスクの所在を具体的に洗い出し、それぞれのリスクに対する処理の方略が通訳者のパフォーマンス向上に役立つと論じている。

今後の課題については、リスクの所在をより深く、より広く探求する必要があること。そして、このリスクベース分析を通じて、通訳者のパフォーマンスをより公正に評価・監査・ランク付けできる「リスクベース評価体系」の構築へと発展させたいとしている。

[評価]

本論文は次の五点で評価できると考える。

1、論文の題目が明確かつ適切であり、課題意識が鮮明で、独自の研究視点を持ち、中日通訳研究に資するものである。中日・日中の通訳翻訳研究はこれまでもそれなりの成果があったが、欧米の最新の通訳翻訳理論を応用しつつ、中日・日中の事例を考察して、通訳については同時通訳を研究しているものは少なく、リスクの概念を導入して研究したものはまだ見当たらない。通訳活動をリスクマネジメントの観点からの分析するという研究は、従来の中日通訳研究の理論を補完して、中日・日中同時通訳研究の一空白を埋めるものといえる。

2、先行研究の把握が適切で、収集した資料が豊富である。中国の通訳翻訳研究、欧米の通訳翻訳研究の資料を最大限に収集し読み込んで纏めている。(第2章)

音声資料は、難度の高い事例を使い、丁寧に整理して分析に備えている。A: 香港・フェニックステレビの時事弁論会 2013. 9.14 「2013 探索中日大智慧(日中関係の大きな知恵を求めて)」の音声書き起こし資料(添付資料③68 頁分) B: 中国中央テレビ局(CCTV)の報道:「東日本大震災発生後の NHK ニュースを同時通訳付きで生中継したもの」の音声書き起こし資料(添付資料④17 頁分)

3、論述にあたり、図による視覚化の工夫がなされている。同時通訳の分析の大前提としての「同時通訳のイメージ図」を、Robin Setton が提唱した同時通訳モデルを参考にしながら筆者独自のイメージ図にまとめている(p2 図 1)。通訳活動におけるリスク所在を論述する際に、通訳サイクルを示した図(p43 図 9、p50 図 10)を提示している。いずれの図も綿密に作成されたもので、巻末に拡大図をつけている。

4、研究方法・論文の構成のいずれも理に適っている。先行研究を正確にとらえ、その理論を応用して、しっかりとした実証研究をしている。データ、例文の選択も適切で、中日・日中の同時通訳の事例も、中国のトップレベルの通訳者のパフォーマンスの中から厳選した音声資料を書き起こし、定量、定性的な分析を通じて考察と分析を行っている。

5、結論は信憑性が高く、中日・日中の同時通訳研究と実践に大いに参考になる。研究はリスクの概念を導入したうえで、具体的な事例を分析し、リスクベース評価の必要性を力説し、その体系の構築を提案しようとしている。考察と分析はいずれも成功していると思われる。

以上の五点をもって、審査員一同はこの研究の学術的価値を認め、質の高い博士論文であると判断する。口頭発表ならびに口頭試問でも明晰に論旨を述べ、質問には的確に答えて、時間をかけて丹念に作成された論文であることが確認できた。本論文は博士(学術)の学位授与要件を十分に満たしていると判断する。

筆者の車穎氏は、厳しい実践訓練やインターンシップでの実地訓練・研修を経て、通訳者としての実感を持ったうえで、研究に取り組んでいる点も特筆に値する。今後の研鑽・研究によって更なる成果を出すよう期待するものである。